

ペルシア湾岸で発掘された墓廟建築

Religious buildings excavated on the Coast of Persian Gulf

佐々木 花江

はじめに

1988年より始めたアラブ首長国連邦ラッセルカイマ首長国のジュルファル遺跡調査は、6期目の1993年度で現地の発掘を終えた。ペルシア湾の交易都市として知られるジュルファルに住んだ人々の生活を復元し、交易品から人や物の交流を研究することが調査の目的である。ジュルファル遺跡の居住区域は、主要な建物によって七つの文化層に分けられる。この文化層はそれぞれ、いくつかの居住面に細分される。大量に出土する中国やタイ、イランなどの陶磁器から推定すると、発掘区域が繁栄した年代は14世紀中頃から15世紀末頃と考えられる。最終年度には、継続調査していた居住区域に隣接する小丘を新たに発掘し、墓域と墓廟、あるいはモスクの可能性のある遺構を発見した。発掘地域の歴史的性格の復元に、この建物の発見は大きな意味があるため、構造と関連する事柄を検討したい。

宗教建築と墓の発見 (図1)

宗教建物が発掘されたのは、島状、あるいは半島状に延びたジュルファル遺跡の西南先端部に近い西側の小丘で、遺跡全体の海岸線を見通せる場所である。その地形的な特殊性から、通常の居住域と違う施設の存在が予想できた。マウンドは、居住区発掘地点から50m程離れた、海に突き出た波打ち際にある。ここで、15世紀の廟、または礼拝所(マザール、またはモスク)である可能性の高い建物と墓群の存在が確認された。この宗教的な建築は、上下関係すなわち新旧関係にある3棟が同じ場所で発見された。建物入口とミヒラブの可能性も考えられる礎石が、ほぼ同じ位置で上下関係で確認され、同じ性格の建物が相次いで建てられたことがわかる。建物群の南側には複数の墓が存在

する。

宗教建築の構造 (写真1)

出土した遺物から推定すると、15世紀ころ、ここは半島状に突き出た砂丘の先端に近い、海拔57cmから100cm程の低い砂地であった。発掘中の最高潮位は+40cmであり、明らかに海岸の波打ち際に近い砂浜であった。礼拝所(廟 or モスク)、および墓地建設のために、建物を中心とする範囲に粘土を運び、砂面上に厚く盛り上げ、平坦面を造成している。貝が混じる砂層と混じらない砂層の両方が基盤となっているが、粘土が50cmほど盛られ、粘土層表面の標高は150–160cmほどになる。粘土層に遺物はほとんど含まれないが、少量の土器と炭が混入しており、水平に何度も盛土された場所もある。粘土層の上に造られた建物は、古い順に建物A、B、C、D、墓地である。建物AとBの新旧関係は、上下関係にないので不明瞭である。建物Bの崩壊後、そのほぼ同じ範囲上の西側と東側に建物CとDが造られた。また、建物Bの床面と推定される面よりも下方で離れた地域に、石列と日干レンガ壁が見えるので、建物Aの存在も推定できた。ただし、これは建物Bに伴う可能性もある。

〔建物A〕

砂層上に粘土層を造成して初めて建てられた建物で、わずかな壁の列を確認した。砂層上に基礎として貝混じり石を3段敷き、その上に黄色粘土日干レンガを4段積み上げているのがわかる。さらに、その上方に石列が並ぶが、それは建物Bに伴う可能性がある。

〔建物B〕

盛られた粘土層上に建てられた、大きな石製の柱台を三本配置した建物である。床内には何枚かの薄い粘

土層があるので、何度か床の張り替えがあったようである。壁基礎が建つ面は、粘土層表面よりも少し低い位置である。石組壁と粘土壁の両方が各所で発見され、4段ほどの白い石灰石や貝混じり石を積み上げた大きな石製柱台を中心とする部屋の範囲が推定できた。建物の壁は床上面に近い部分にだけ低く残り、壁の痕跡がない部分も多い。壁基礎は低い石積みである。出入口は東側にある。出入口部分には礎石がなく、北側には礎石が並んでいる。出入口の北側には、長方形の掘り込みがある。丸い石を積んでいるものと、内面に泥が漆喰のように塗られているものがある。建物に付随する宗教関連施設であろう。

西側の粘土層表面で発見された、円形の石と円形のピットがミヒラブの可能性のある柱跡で、壁と平行の位置で発見された。これより上の建物Cでも、同じ場所の高さが違う位置に同様の石が並んでいた。円形のピットから抜き取ったと推定できる礎石も数十cm上部の建物C床内で発見された。位置は変わらずミヒラブが何回か作り替えられた場所と推定できる。奥壁中央にミヒラブがあるとすれば、北側二本の柱の中央奥にミヒラブがあったことになる。大きな石製柱台とミヒラブの距離は、柱台の間で5.7mと長い。

〔建物C〕

海際にもっとも近い西側に造られた一部屋の小さな建物である。貝を敷いた床面の一部が残るが、壁は残らない。すぐに海が迫っている西側と北側の床は残っていない。室内の大きさは6×4mほどである。建物B建設時に盛った粘土層の上に、砂や小さな炭化物を多く含む土を40cmほど積み上げ、厚さ10cmほどの粘土を平坦に貼り床面を造成している。この上に碎けた貝片を数cmの厚さに敷きつめている。床上面の海拔は200cmである。石混じりの土とともに厚さ4cmほどの漆喰が粘土面の上から出土しており、倒れた壁であることがわかる。東側の中央部には壁の痕跡がないため、出入口であるとおもわれる。出入口から粘土層は下に向かって傾斜しており、石を並べ土止めにしている部分もみられた。

ミヒラブの可能性のある部分は、部屋中央部より西側・海側の床上に残る石組である。厚さ20cmほどで、4個の比較的大きな平坦な石が床上の貝層上に

載っている。壁際ではなく室内の床上であるが、建物Bでも同じ場所から礎石が出土している。同じ床上の50cmほど離れたところから、型押文字文の青釉タイルの破片が出土した。湾岸の遺跡からの装飾タイル出土は、初めてと思われる。さらに、その南側に、一列に並んだ礎石が4個出土した。いずれも床の粘土面を掘って置かれており、一つは石の上の柱が置かれた部分にだけ粘土がなく、そこに柱を立てたことが容易に推定できる。円形の僅かな窪みのある石灰岩は、建物Bから抜き取った石であろう。いずれの石もほぼ水平に置かれ、柱の並んでいた状態がわかる。

〔建物D〕

最後に建てられた建物Dは、建物Bの柱を室内に残しながら、ほぼ同じ範囲の南半分に床を高くして建てられている。建物Bの床上に、土器や炭混じり土を盛り上げ、その上に貝層を15cmほど厚く敷いている。床面の高さは225cmである。建物Bの北側柱台石の上面には漆喰が付着し、中央部分の柱台石の上には床の貝層が薄く被り、その上の少しずれた位置に薄い石を置いている。古い建物の柱台石を、調整しながら再利用しているのがわかる。部屋の出入口は東側にある。出入口部分は粘土の面がはっきりと残っており、室内が少し低くなる。出入口の外には小石が多く含まれた斜面が続き、部分的に幅の広い階段になっていた可能性がある。

墓 (写真2)

建物の南側に墓域があった。長方形に墓穴を掘り、周囲に小石を並べる。造成された粘土内、および、その上に盛り上げられた炭化物混じり土に墓穴が造られており、建物造成より後に墓が造られたことが明瞭である。墓石の面が当時の地表面と推定できるから、多くの墓は最近のものではない。居住区の1層から3層の時期の直後であろう。

墓廟建築と発掘区域の問題

居住区では、その層位的発掘により、14世紀中頃から16世紀初にかけての生活が復元された。初めてこの海岸の砂浜の上に、掘建柱に囲いを巡らした程度の小屋が建てられたのは、14世紀中頃であった。海産物に

頼った生活であったことは、動物の骨よりも貝や魚の骨が主に発見されることで容易に想像できる。14世紀後半になると、日干レンガの建物に人々は住むようになる。部屋の列に囲まれた中庭には竈、井戸が見られ、隣の中庭を持つ屋敷とのあいだ、つまり、自家の壁と他家の壁が接する場合と、道路になる場合があった。日干レンガの建物は何回か建て替えや改築がなされるが、ほぼ同じプランであり、既に屋敷地割りの決

まった、込み入った住宅街になっていたと考えられる。この区域の廃棄年代は、遺物から16世紀初めと思われ、柱穴から想像される幾つかの小屋の跡が住居痕跡の最後となる。

すぐ目の前の砂浜に、粘土を盛って特殊な建築を建てた時期は15世紀と推定できる。そして居住区とのつながりがどの様になっていたのか調査されなかったのは残念であるが、人口密度が最も高かった時期にのみ

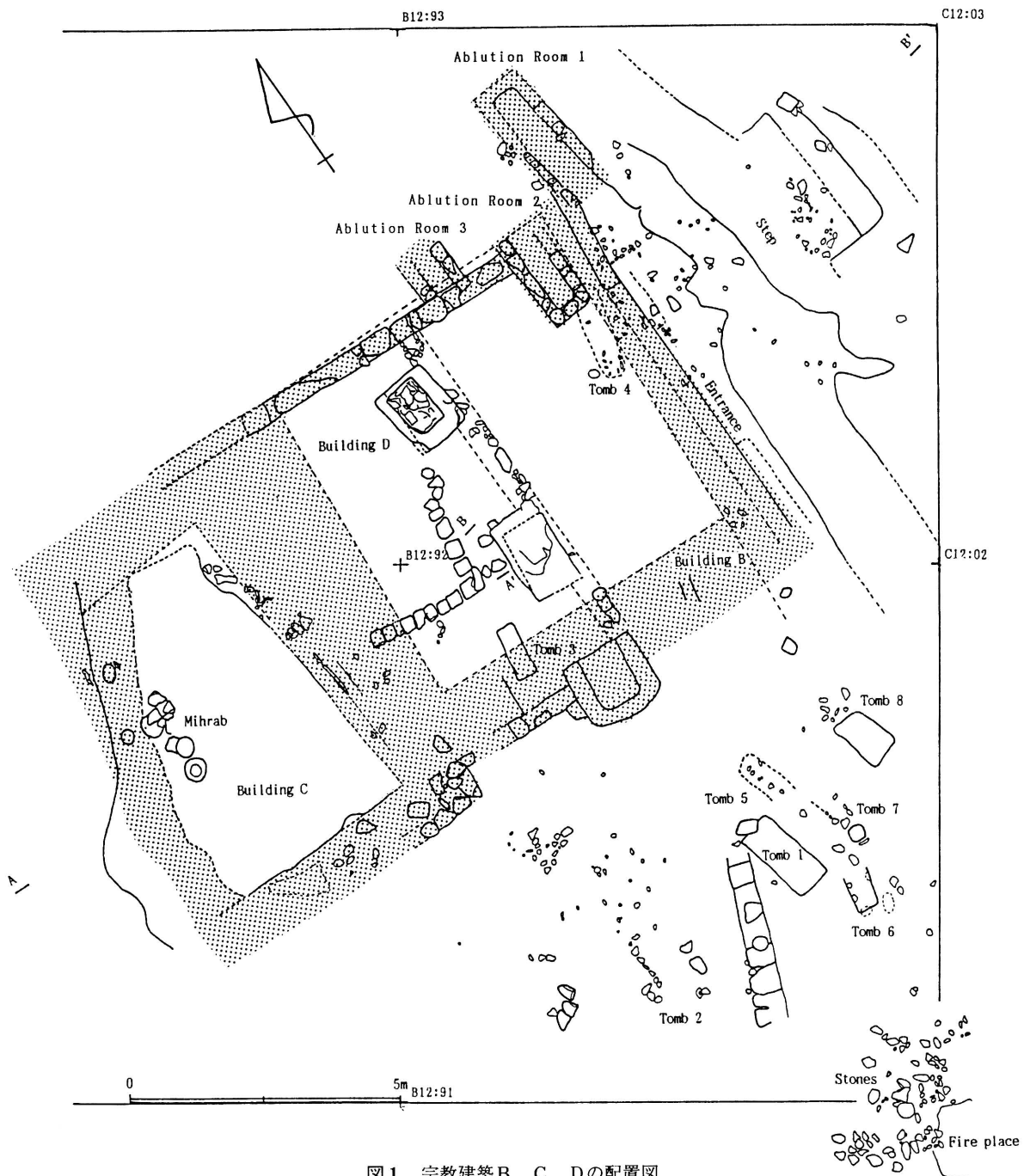


図1 宗教建築B, C, Dの配置図

使われた建築物である。

現在でさえ海岸線の浸食が目に見えて進んでおり、当時の建造物全体の様子を知るには破壊されすぎている。しかし、宗教関連と考えられる建造物の奥壁が、残った床面上に明確に現われないのは、気になるところである。モスクでは、ミヒラブと同様に奥壁自体が重要な意味を持つという慣習に従うと、奥壁が発見されないのでは、部屋の中央部で重なって発見された礎石がミヒラブの柱石であるとの説明ができない。墓廟とすれば被葬者はどういう人なのか。一般の墓の被葬者とはどう違うのか。疑問点が多い。さらに 400 m 程しか離れていない所に、5 回も建て直しされた大きなモスクが英国隊によって発掘されている。規模も位置も町の重要施設と考えられるものである。この大モスクと我々の発掘した小規模な宗教関連施設との新旧関係ははっきりしないが、役割や性格は異なるように感じられる。

ジュルファル遺跡では、城壁の一部が発見されている。我々の発掘地点は、城壁の外部である可能性が高い。ジュルファルで城壁とはいったいどういう機能を果たしていたのであろうか。城壁の建造時期に関する報告はまだ出されていないが、かなり密集した町が形成されていた時、城壁は存在していたのであろうか。城壁の機能していた時期の、経済生活の基盤は何で

あったろうか。そして城内と城外の違いは何か。城壁の有る無しは、町の構成、機能に大きな影響を及ぼすだけに、重要な問題点である。

この地域では、冬は山での農耕、夏は海岸での漁生活という季節的移住パターンが近年まで続いていた。14世紀後半と16世紀初めの層で発見された掘建柱の小屋は、この生活パターンを説明するのに都合がいい。ではそのあいだの時期はどうだったのであろうか。日干レンガの建物は、風や雨による壁の浸食倒壊が容易で、半年程も誰も住まない状況では維持出来ないはずである。従って15世紀のジュルファルは、人々が海岸の町に定住していた時期であると考えられる。そこには交易経済都市としてのジュルファルの姿が浮かんでくる。

貿易によって取引された商品の殆どは消費され、朽ちて、今日の遺跡からは出土しない。資料として遺跡から取り上げられた物のうち、陶磁器のみが、有効に当時の貿易の状態や経済生活を語るものであった。そして今回の宗教関連の建造物の発掘は、大きな建造物のみが往々にして記録されている中、庶民の精神生活を探る一つの記録という点で意味のあるものであろう。中世都市の発生と衰退、人々の物質的、精神的生活など、イスラム都市の理解に参考になる資料が得られた意義は大きい。

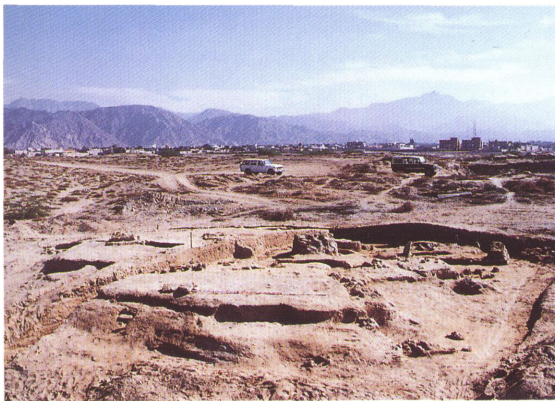


写真1 宗教建築遺構（西側より）



写真2 墓（北側より）